今月の御聖訓

王地

に生マレたれば身をば随へられたてまつる
やうなりとん(も)、心をば随へられたてまつ
るべからず。

【撰時抄　二八七頁】

目　　次

今月の御聖訓
巻頭言……菅野憲道　1
お講講話　「本宗の法衣と数珠」……菅野憲道　2
天地つかの間〔その㊳〕……成田詳道　8
葉月詠草　恵日俳壇……10
【法華講総会―所感発表】
「明日に向って頑張りましょう」……佐久間勝治朗　11
忘れられた総講頭」〔五〕……槻木守三　14
ちょっと寄り道㊳〈ビジネスチャンス〉……森田観道　18
読書案内『坊ちゃんの時代』……松田銘道　19
恵日だより……20
八月の行事

表紙写真撮影:松井義信氏　題字:立正安国論より拝写

巻頭言

江藤淳の遺書

菅野憲道

七月二十一日、江藤淳（六十五歳）が自殺したことが報じられた。遺書によると、軽い脳梗塞で倒れて不自由となった自分は、もはや本当の江藤淳でないから、自分で処決するということらしい。それにしても、芥川竜之介はじめ三島由起夫や谷崎潤一郎など、どうしてこうも文士に自殺者が多いのだろう……。

思うに、彼らには一定の美学や思想があり、それが老衰や病気という反対の事実に遭遇した時、その事実を否定するために自決するのだろうか。イデーと現実の乖離に耐えきれなくなった時、その矛盾を自ら身を処して決着をつけようとするのだろうか。いずれにせよ、彼は人間に何を見ようというのだろうか。

美学や正義を追求するのもけっこうだが、人間が生きるということは、もともとそんなに格好いいものでもなければ完全なものでもない。そうかといってそれほど邪悪なものでも、醜いものでもない。文学というものが、人間に内在する、ある一面だけを掘り下げて、どこまでもそれにこだわって描き出そうとするものであるなら、その行為自体が、偏見の落とし穴に陥ることになりはしないか。

都合のよい自分だけが自分であって、それ以外の自分、すなわち病気の自分、年老いた自分を自分でないとするのも、ずいぶん身勝手な思想で、それなら、世の障害者は生きる価値がないのかと反論せざるをえない。乙武君のように、なぜ自分の身体がちょっと他人と違うだけと考えられなかったか、なぜ精神に少しも変調がなかったことをありがたく思えなかったか。いま現に周囲の人とともに病と闘って生を全うしようとしている人々、同じような境遇にある人のことを思えば、他人の介在することを許さない、自分のことだけで完結した観念と評さざるをえないし、江藤氏の思想の限界といわざるを得ない。さらに、理性のみを偏重する現代思想の、その底に流れる、かたくて寒々とした無機質なものを感ぜずにはいられない。

ただ生きることに疲れたと弱音を吐くならまだしも、病身の自分を自から処決するなどとは、江藤氏らしからぬ遺書である。

それにつけても、龍口の刑場で「これほどの悦びを笑えかし」といって少しも動ずることのなかった宗祖が、身延山中で病まれて、起き伏しもままならないとき、信徒から届けられた一杯の酒に感謝の涙を浮かべられたことを思い出し、あるがままに生きる法華経の信仰のありがたさを思うのである。江藤氏に一遍のお題目をおくって追善に資したい。

お講講話（要旨）

拝読書　「当家三衣抄」（六巻抄三四六頁）

本宗の法衣と数珠

菅野憲道

先月の御講のおり、住職就任二十年の祝いとして法華講の皆様から袈裟・衣をご供養いただき、ありがとうございました。本日はその法衣を着けて御講を勤めさせて頂きました。またこの前も、ある婦人から積み立てたお金を法衣代としてご供養頂きましたので、その恩に報いるためにも少々法衣についてお話しさせていただきます。

《衣は身の章》

本宗では、法衣について古来より大変厳格な定めがあり、日興上人の「遺誡置文」の中には、

「衣の墨・黒くすべからざる事」（興全二八四頁）

と、わざわざ一カ条を設けて制しています。

ふつう一般の宗派では、紫や緋や黒衣から、インドの仏僧が着るような木蘭色（黄色様）のものまで、種々の法衣があって、同じ宗派内でも統一されていない所も多いようです。

それに比べ、本宗では貫首から所化に至るまで、みな薄墨白五条の法衣に統一されており、身延派などが黒衣や色衣を着ることを、謗法であるとして厳しく批判してきております。これが一つには日蓮宗と日蓮正宗との大きな違いです。

本宗において、伝統的に薄墨素絹の衣・白五条の袈裟をかけることは、なんといっても大聖人ご自身が薄墨の衣に五条の袈裟を懸けておられたのであり、その化儀を日興上人が後世に伝えられたからですが、それだけにとどまらず、中には深い法門の意義が込められています。

これは、日寛上人の「当家三衣抄」の冒頭に、

「衣は身の章」（『六巻抄』三三一頁）

とあるように、昔はその人が着るものによって位や職業、あるいはその人の信仰が表現されていたからで、このことは特に中国では厳しく定められていたようです。

例えば「天子は十二

天子の十二章

章」といって、皇帝の着る着物は、最高位の色である黄色に、日・月・星辰・竜・山等と、十二の模様が刺繍されており、それらの模様は天子の一つひとつの徳を表現しているのです。また、大臣以下家臣にも、それぞれ位によって、模様や色が定められておりました。

これらの制度は日本にも強い影響を及ぼして、日本でも位階によって細かく決まっていて、少なくとも江戸時代までは、武家や朝廷、お寺や一般の職人に至るまで、みな着るものによって自分がどういうものであるかを表わしていたのです。

現在は乱れてきていますが、それでも銀行員などは必ずネクタイにスーツですし、警察官とか消防士、医者や看護婦など、みな一定の制服があって、服そのものがその内容を表わしています。たとえば、喧嘩や交通事故の場に制服の警官が到着しただけでも、その場の秩序が持たれるということがあるように、中身の人間以上に、制服には重要な意味があるのです。

このように、昔から、世間においても仏教の世界においても、どういう衣服を身につけるかは重要な意味を持っているのです。

《素絹五条の袈裟》

さて、三衣といいますと、普通他宗では袈裟と衣とその中に着る内衣をさしますが、本宗では袈裟と衣と数珠を三衣としています。また当宗の袈裟は、平五条といって、平織りの五条の袈裟です。この袈裟は他宗では一番位階の低い僧侶のかけるもので、所化が初めてかける袈裟は、どこでも平五条の袈裟です。他宗の場合、高位にすすむと七条、九条等と奇数条の袈裟が二十五条まであって、大きな袈裟になります。

しかし、当家では大袈裟を用いることなく、大聖人以来五条のみをかけますが、これには大変深い意味があります。

【末法下位】

まず、末法という下根下機の衆生を救うには、立派で高い位の姿では、衆生は別世界の人だと思い込み、縁のないものと考えますから、末法の導師は、わざわざ凡夫僧の姿で現われるといいます。不軽菩薩などがその例です。そのために袈裟も一番下位の五条をかけるのです。そのことを文句二には、

「**教弥実位弥下**（教いよいよ実なれば位いよいよ下し）」

つまり、教えが深く真実であるほど、修行者はその位を一番低くとって、最底辺の衆生をも救うのであり、逆に、方便の教えほど、上根の一部の衆生しか対象にならないから位を高く取るといわれているのです。

【末法折伏行（行道雑作衣・忍辱鎧）】

また、当家の袈裟が五条と小さいのは、行道雑作衣といって、末法修行の時、町中や山谷荒野どこにあっても、法華経を行じていくのに簡便な折伏行の法衣であること、いろいろな雑用に便利な法衣として、わざわざ五条・素絹衣を用いるのです。

実際に、大聖人のご一生は法華弘通の大願のもと、いろんな法難に値いながらも各地を歩かれています。行動的な五条・素絹という法衣が理にもかなっています。しかも忍辱の衣（鎧）といい、法難や貧道・寒暑の生活苦まで、この法衣のゆえに耐え忍ぶことができるともいわれています。

《薄墨の法衣》

次に袈裟の色ですが、大聖人の門弟は白袈裟です。大聖人は時に白袈裟、だいたいは薄墨の袈裟だったといわれております。素絹衣

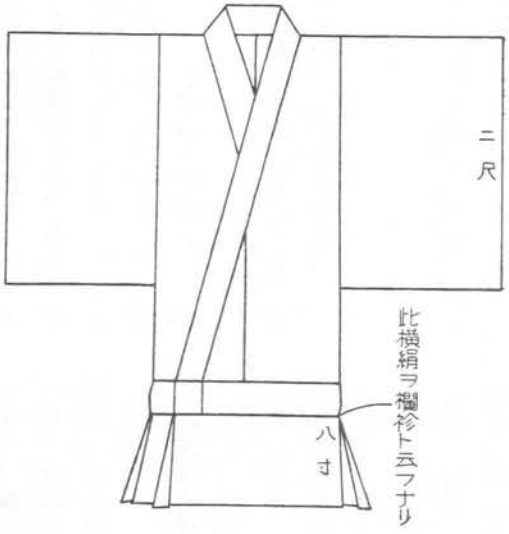
の方はもちろん薄墨色です。

この薄墨ということには重要な意味があります。天台宗では、平安後期に「薄墨中道」という口伝法門があり、薄墨は仏が成仏する刹那を象徴するとされておりました。これは薄墨が黒白の中間であり、一日に例えれば夜が白々と明けてくる時刻、明闇の中間ということに、重要な意味を持っているのです。

本宗に相伝として伝えられる丑寅勤行も、明けの明星の頃から、少しずつ夜が白んでくる頃、薄墨の時刻、丑寅の方位において勤行を行いますが、薄墨色は諸仏成道の姿、法華の即身成仏を象徴しているのです。

【名字即を表わす】　薄墨は、一般仏教や天台では仏道修行の六つの位（六即）の中で、まったく信心していない状態（理即）から少し信心を起こした位である「名字即」を表わします。お経の中の「一念信解」「初随喜」という初信の位を「名字即」ともいうのです。

仏道修行の階位を、天台宗等はこの上に、観行即、相似即、分真即、究竟即（仏位）を立てますが、本宗ではそれを取らず、ただ信か不信かの二つに分け、不信は理即の位、わずかでも信を起こせば名字即の位という分け方で、その名字即に即身成仏の姿を立てるのです。



素絹衣の図（「対俗三衣談」より）

成仏の要因を、すべて一念信解に求める本宗では、位といえば名字即しかないことを、衣の色の薄墨で示しており、高位を表す赤や紫色などは仮りの説、方便教とみなします。

要は信の一字といって、いまは学問や修行もなく、難しいことが分からなくても、南無妙法蓮華経こそありがたい仏法であることに目ざめ、この仏法を喜んで信心修行しようという心を起こすところに成仏の根本原因があるとします。もしこれを失ってしまったなら、たとえどれだけ頭脳明晰でかつ体力の優れたものが修行と学問を積んでも、成仏の種がないのですから意味がありません。それゆえ本宗では名字即を重視するのです。

【他宗に簡異せんがため】　また、他の宗派と違うことを明瞭にするために、わざわざ薄墨の衣を着ているということがあります。

私たちは大聖人・日興上人の門下ですから、宗開両祖がお定めになった袈裟衣を着ていくのは当然のことです。こんな当たり前のことが日蓮宗では混乱しているのです。本宗は「他宗に簡異せん」がため、すなわちこの法衣は自分たちが大聖人・日興上人の門下であること明瞭に示すためでもあります。

【順逆二縁を結ばん】　また、この薄墨の姿が、それを敬う人も反感や軽蔑の心をおこす人も、順縁・逆縁の仏縁を結ばしめることになります。

【自門の非法を制せん】　さらに、この法衣を定めることによって、自門の内部における堕

落や逸脱を防ぐという意味も持っています。

薄墨・白五条の法衣を着けている限りは、どんなことがあっても世間で高位といわれる紫衣などは望みえません。我われ自身、袈裟衣をかけることは畏れ多いことで、つねに袈裟衣に対して、自分たちのしていることが果たして大聖人のお心に適っているだろうか、袈裟をかけるに値するだろうかという自省自戒の念が湧いてきて、自分たちの身が律せられます。

また、薄墨は粗末な姿ですから、法衣そのものにはでな贅沢はできません。他宗の緋の衣等は桁違いに高価なものです。また素絹衣は夏でも冬でも裏地のない質素な単衣（ひとえ）です。

《三衣即三身如来の相好》

以上が、「当家三衣抄」の中の袈裟と衣についての大まかな説ですが、これとは別に、今から四二〇年ほど前に、保田妙本寺の日我師は「化儀秘決」を書かれて、当家の三衣について解説されています。

その中で日我師は、三衣は「法体の威儀」であると説きます。法体の威儀とは要するに、仏法そのものを一定の化儀の上において象徴しているのであって、三衣の中には、自ずから我われの信仰の内容を表現しているというのです。すなわち、三衣について、

「三衣即三身如来の相好なり」（富要一一三〇九頁）

「三業相応して題目を唱ふれば僧形即仏形なり。無作三身の全体なり」（同）

等と、まさしくこの袈裟・衣・数珠を身につけて、身と口と意が一致して法華経を修行する僧形が、そのまま末法の仏だと説いているのですが、これは日蓮大聖人の僧形がそのまま仏様の姿ということで、末法においては法華経の行者の姿そのものが、無作三身の全体であるということです。

我われも、この大聖人・日興上人のずっと後の末弟ではありますが、袈裟衣をかけることを許され、大聖人のお使いとして、または代理として御授戒をおこなったり、葬儀の導師をつとめたりするのですが、大聖人のお使いという意味で、この法衣は大変重要な意味を持ちます。たとえば制服の裁判官や警察官に乱暴すれば、そのまま国家や法律に対する挑戦と見て罪は重くなります。たとえ所化小僧でも、法衣をつけていれば大聖人のお弟子、お使いとして敬うことも同様です。

ところが最近の創価学会のように、建前は日蓮大聖人をあがめながら、僧宝をまったく否定し、有給幹部（有髪の僧）がスーツや裁判官が着る黒服のようなものを着て葬儀の導師をつとめているのですが、まったく頭破七分の姿以外の何ものでもありません。自分たちが大聖人・日興上人の門下でないことを、如実に表した姿です。大聖人・日興上人の門下であるならば、大聖人・日興上人の袈裟衣を着けるのが道理であり、その門弟を手継の師匠として敬っていくのが常道だと思います。

創価学会の信仰をしている人々は、大聖人・日興上人に帰依するという心がない失本心の衆生だから、こういうごまかしを何とも思わないようになっているのです。

《三衣の意を含む当家の数珠》

次に数珠ですが、すでに三衣に三身の姿が表現されていますが、在家の皆さん方はお数珠だけで三衣の三つの意を含んでいるといわれています。

数珠は左側の父珠、右側の母珠で釈尊と多宝という境智を表わし、

それに四菩薩と称する小さい四つの珠との三つで仏法僧の三宝を表わしています。また残りの百八つが法身を表わします。我われの煩悩が、南無妙法蓮華経と信ずることによって菩提に転じ、そのまま煩悩即菩提という法身の珠、如意宝珠であるとことを象徴しております。決して本宗の珠数は煩悩の珠ではなく、煩悩がそのまま妙法蓮華経の宝珠に変わったという姿を表わします。

これら仏と菩薩（僧）と法とが、みな合わさって境智冥合する世界が、合掌という世界です。またこれが自分の姿であり、そのまま境智冥合の即身成仏の姿であるという重要な意味を、この数珠が象徴しているのです。

さらにいえば、末法に法華経を受持するものは、父は大聖人、母は日興上人と仰ぎ、宗開両祖に師弟相対して南無妙法蓮華経と唱える境智冥合の世界を表わしています。

要するに、我われがご本尊の前に座って南無妙法蓮華経と唱えるところは、そのまま大聖人・日興上人に対して我われが帰依する道場（戒壇）であり、またたとえ御本尊様が安置していなくとも、また旅行中でも病院で療養中でも、手に数珠をかけて南無妙法蓮華経と一心に信じて唱えれば、そこに下種三宝に境智冥合し、本仏世界が涌現していることを表わすのです。

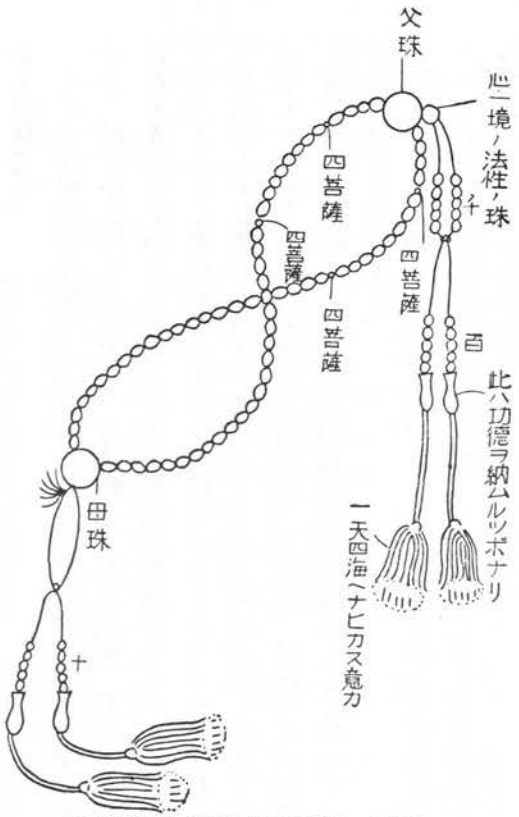
また「六巻抄」に、**（『六巻抄』三四六頁）**

「それ数珠とは下根を引接して修行を牽課する道具なり」

とあるように、数珠を持つことによってはじめて、お題目を唱えようという気になるのです。

たとえば入院しているような時でも、数珠がなければ中々お題目を唱えようという気にはならないのですが、不思議と数珠さえあれば唱えられるようになります。数珠のことを**「常随持身**（いつでも我が身に持っている）」というように、どこであっても数珠を持ってお題目を唱えていくことが大切なのです。

ただし、お数珠は平形（そろばん珠のような形のもの）は使いません。たまに知らないで房が紫や赤い房を使っている人がいますが、これもいけません。やはり大聖人・日興上人のように、白房でなければなりません。



数珠の図（「対俗三衣談」より）

白は、白蓮華を表わしていて、そのまま大聖人の仏法を大白法と称したり大白蓮華というように、また大聖人が日蓮、日興上人が白蓮と名乗られているように、妙法蓮華経とは、白蓮華のことであり、それは我われの信心そのものが、泥中に咲く白蓮華そのもの、妙法蓮華経の姿そのままということを象徴しているのです。その白蓮華の信心を、常に、身をもって受持していきなさいということが数珠の意味です。ここに「当身の大事」とか「当体蓮華」という意味が

込められているのです。もちろん薄墨素絹衣に白五条袈裟も同じ意味なのです。

また「当家三衣抄」最後のところにも、

「此くの如き三宝を一心に之れを念じて唯当に南無妙法蓮華経と称え乃ち一子を過ごすべし」（同三四七頁）

要するに六巻抄の結論ともいうべき最後に、勤行の観念文にあたる仏法僧の三宝が示されておりますが、御本尊（法）大聖人（仏）と日興上人・日目上人以来代々上人等（僧）が、当家の三宝として、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱える時に、数をかぞえて数珠を繰るのと同じように、一遍々々のお題目に、仏法僧に帰依するという意味が込められているとの仰せなのです。

依法不依人を基準として正法正義が定まれば、そこに自ずから仏（導師）というものが定まります。その仏宝が定まることによって僧宝（仏の教えをとりつぐ弟子）も定まる。ここに仏法を信ずることが、下種三宝への帰依として現成するのであります。仏法は信ずるけれども僧宝は無視する、なんていうおかしな信心は成り立たないのです。

《次第を超越するなかれ》

また、その後に、

「行者謹んで次第を超越する勿れ（なか）**」**（同）

とあり、我われが法華経の信心をする上で、その順序次第を間違えてはいけないと説かれております。

これは、お題目を唱える時に数珠を繰ることがありますが、この繰り方に二つの解釈があります。どうも要法寺の影響によって、「母珠を超ゆること勿れ」の解釈を間違えて、数珠を繰る際、右から繰って母珠まで行った時、そこで折り返すか、元に戻るという解釈をしたようです。

しかし、日因上人がこれを徹底的に調べられて、母珠を越えるというのは、母珠に至った時、それを飛ばしてしまって次の小珠に行くことで、これは妄語罪や越法罪にあたるからよくない。数珠の珠を数える時は、母珠も同様に数えなければいけないという意味に解釈しております。

また、数珠の珠は仏法僧の三宝を表わし、その三宝を受持して南無妙法蓮華経と唱えているのですから、母珠だけを外すのはおかしいとも説明されています。

本宗では、父珠と母珠はそのまま大聖人（仏宝）・日興上人（僧宝）を表わし、我われはそれに帰依するのですから、もし我われが信心決定して南無妙法蓮華経の当体蓮華仏の姿となったとしても、そこにはやはり順序次第があって、大聖人・日興上人がいらっしゃってこそ我われの成仏もあるのです。その順番を間違えて大聖人直結だとか、あるいは大聖人以上に我われが仏になってしまったら、増上慢の極みと言うしかありません。それでわざわざ、

「行者謹んで次第を超越する勿れ」

「母珠を越えること勿れ」（同）

等と書かれて、越階の罪を説いて慢心を戒め、「当家三衣抄」の結論とされるとともに、「六巻抄」全体の締めくくりともされているのです。

今後とも、そのつもりでお数珠を肌身離さず持つとともに、下種三宝を片時も忘れることのないよう、身口意に受持していきたいものであります。

南無妙法蓮華経　（了）

天地つかの間〔その三十八〕

戒田詳道

わが家の金魚が死んだ。氏素性はさだかでないが、奈良県は大和郡山で生まれた、由緒正しき金魚である、と思う。

この金魚、身の丈は二寸を越え、赤色が淡く、三枚におろそうと、姿造りで飾ろうと、けっして見劣りしない、王者の風格をそなえる。

その金魚、先祖はフナの変種と聞くが、いまに百瀬の滝を駆け昇り、竜門の滝にも挑む勢いである。夜中にこれが水面を跳ねようものなら、二階のわれらは、その音に驚いて眼をさます。

この堂々たる金魚も、実はちょうど二年前、幼稚園の夏祭りに、金魚すくいで持ち帰った、雑魚の中の一匹である。この手の金魚は、どうせすぐに死ぬだろうと、部屋の隅でポリバケツに水を入れ、エサをのみ与えていた。

※　※

案のごとく、ジャコの兄弟みたいな金魚の群れは、一晩で次々に赤い腹を見せて、浮きあがった。気づいた娘は、しきりに残念がるが、こちらは先刻ご承知だから、しばらくは、娘が起き出さぬうちに、毎朝ソッと片づけた。

それでも数週間を生きながらえて、まだ五、六匹の金魚が、バケツの中を泳ぎ回る。そんなある日、蚊がうるさいので、夕方に蚊取りベープをつけた。食後の片づけも終って、なにげなくバケツをのぞくと、なんと金魚がみんな、腹をみせて浮いている。

美容室だった一階は、扉を閉めると密室状態に近く、そこにベープマットの、妙な臭いが漂っていた。思わぬ出来事に愕然としたが、後の祭りである。

気落ちした娘と、一匹づつすくい上げていると、下の方に二匹だけ、金魚がジッとしている。この深く静かに潜航していた一匹が、だれあろう彼の金魚である。まるで、ナチス・アウシュビッツのガス室から、奇跡的に生還したような二匹の金魚であった。

とは言うものの、主人が借家住まいなのに、金魚だけ専用の水槽でもあるまいと、やはりポリバケツ生活だ。一年がたって少しばかり情が移ったか、今度は水草を入れ、水が濁らぬようなエサも、吟味した。ところが、これが怨となった。

ある朝、一匹の金魚が水草の葉を、すべて食べ尽くし、お腹をパンパンに膨らませ、仰向けに浮いていた。むざんにもただの細い棒となった、水草の茎が何本も、金魚の両脇にまとわりつき、ふくれあがった腹と、対称的であった。

そんなわけで、一匹だけ残された金魚は、激動のポリバケツ生活を、自力で生き抜いた、栄光の金魚なのである。

※　※

実はこの春、大きく成長した金魚を、一匹のままで、ポリバケツに飼い続けるのは、可哀想だから、幼稚園の水槽に引き取ってもらうか、はたまた近くを流れる千里川に放してやるか、今年の夏祭りの日までに決めよう、と相談していた。

私はこの金魚が水槽の中で、狭苦しく生きるより、広い千里川に放せば、小さなフナぐらいは子分に従えて、大きく生きるに違いないとの、確信があった。それのみか、あわよくば、やがて金魚の恩返しも・・・などと、むしの良いことも夢想していた。

ところが、夏祭りの金魚すくいでは、どうまちがったか、娘の友達が釣った金魚までも、わが家に持ち帰るはめとなった。この手の金魚がすぐに死ぬことは、百も承知、千も合点、充分に自身も経験済みなのだ。

やむなくつごう、六匹の雑魚を大金魚のポリバケツに同居させた。今年は比較的に元気なものが多かったが、やはり数日後には、一匹また一匹と浮きだした。ところが或る晩、案の外に、雑魚ならぬ大金魚に不幸が襲いかかった。

知人からの電話に応対していると、突然に娘が「ギャーッ」と悲鳴をあげた。その大声に驚いて振り返ると、泣きながら指さすポリバケツのその中で、大金魚は、不沈戦艦・大和の沈むがごとく（実際に見たわけではないが・・・）その体を極めて静かに、傾斜させつつあった。

あわてて別に移したが、あれだけ勇ましかった大金魚は、あたかも観念しきったかのように、ぴくりともせずに死んでいった。王者も雑魚一匹のもつ、病原菌には勝てなかったようだ。

きんぎょ

王者は楠の木の下に埋葬したが、娘の真剣に手を合わせる姿に、いくらか救われた心地がした。

※　※

ながながと金魚の無駄話に、大事な紙面を費やした。実はこの一両年で、私がひとかたならず、ご恩を受けた方々が、相続いで他界した。本当は、その話を書きたかったのだが、どうにも日が浅すぎて、冷静に書けそうもない。

無理に書き始めると、わけのわからぬことや、あげく遺族のプライバシーにまで触れかねない。そこで肖像権や、プライバシーの侵害で、訴えられる怖れのない、わが家の金魚の話にした。では、人と金魚を一緒にするな、との叱責もあろうが、それは甘んじて受ける。

恩義ある人々に、私は何も報いることの出来ぬまま、今を過ごし呆然と自失する。だが、こうして世代の交代と、生者必滅・会者定離だけが、明らかになってゆく。そして残された者は、これからも先人の恩徳をかじり、生き続けるのだ。

余談だが大金魚と、殉死した金魚とを取り除いてみると、一匹だけ元気な雑魚が泳いでいた。かくしてわが家は、これを大金魚二世と決めて、由緒正しい金魚に飼育することとなった。

おシャカな金魚のお話でした。

（源立寺執事）

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕

お茶室で　客待つ間に　水を打つ

枇杷食べて　ニューと出て来る　種太し

【葉月詠草】

〔奥 はつ〕

ガイドライン法案　成立せりと聞く
　戦時知る身に　一抹の危惧

ガイドライン法案
　庶民の危惧など　何かあらん
　憂国の士の　良識を俟つ

〔豪雨に石垣一部崩壊〕

鉄砲水の苦き思ひ出よみがへる
　雷伴へる　夜の豪雨に

石垣の間(あひ)の雑草　抜きみつつ
　ひとりし偲ぶ　遠つ代の祖を

石垣は　今も昔のままなれど
　わが家の消長　秘めて語らず

〔妙猶ばあさん〕

紙魚の香の　のこれる文筥に見出でたる
　天保生まれの　曽祖母が筆跡

誉れあらんよりは　そしりのなき人に
　育てたかりし　四人の子らを

喪中とは　知らで賀状を　くれし友に
　長き無沙汰を　電話で詫ぶる

〔故 橋本 義一〕

永らへてと　六十の賀を詠める祖母
　おさな心に　のこるかんばせ

わが記憶　失せぬうちにと来し方を
　書きとどむべく　机に向かふ

〔橋本 圓子〕

〔吹田市民病院にて〕

主治医曰く　忘れてならじ　気力こそ
　何にもまさる　第一の薬と

信仰を　持たざる人は　お気の毒
　病気に負けて　言葉張りなし

次つぎに　見舞いてくるる　孫達は
　入院の身の　こよなき慰め

〔蛙の子〕

蛙の子は蛙なれども　吾が宝
　良くも悪しくも　夫の血を引く

【所感発表】

明日に向って頑張りましょう

槻木地区　佐久間勝治朗

皆さん今日は。七十三歳になります壮年部の、佐久間でございます。

ものの本によりますと壮年とは五十歳ぐらいまでということですが、源立寺では何故か壮年部に属しております。

自分の歴史、自分史というものを入れて、話を進めさせていただきます。

だいぶ昔になりますが、私は今から五十五年前、戦時中に海軍甲種飛行予科練習生を志願いたしました。七つボタンの予科練といいます。昭和二十年震洋特別攻撃隊の一員として米軍の本土上陸に備え、待機しておりましたところが終戦。十九歳の頃でございます。

大阪の家が空襲で焼かれましたので、広島の母方の田舎に復員いたしました。

昭和二十五年、今の自衛隊の前身であります警察予備隊に入隊し、昭和三十年、昔の軍隊でいいます陸軍少尉に任官。五十年の定年迄勤務いたしました。

私みたいに中佐（二佐）以下の者は五十歳が定年で、連隊長の大佐（一佐）になれば五十三歳ですが、今と比べ随分早かったわけであります。

昭和三十年に、九州久留米にあります幹部候補生学校に入校し、幹部としての勉強をしましたが、特に重視したのが図上戦術であります。家内は、首から上の頭上かなどと申しておりましたが、図上とは地図の上ということです。

この五月に、ハワイの日米合同のシュミレーションがありました。来年一月には伊丹の中部方面総監部で三〇〇〇人規模の訓練があると聞いております。実際ある程度の駒が動きますが、図上戦術はそれの卵と考えて下さい。

５Ｗ（いつ、だれが、どこで、なにを、どのように）の原則に基づいて攻める（攻撃）場合と、守る（防御）場合を検討するわけです。

例えば、攻撃の場合は目標に対し、中央突破するのか、迂回するのか、包囲するのかを決め、要素をあらゆる角度から検討します。情報の収集は、気象、地形、接近経路、隠掩蔽、彼我の相対戦力、火力（砲）・戦車・飛行機の援助の有無、ＬＤ（攻撃開始）線は、その時期は、その他。等々であります。

そして、指揮官の決心の補佐をし、指揮官はそれに基づき決心（方針）し、右か左かを決めます。例えば、右の場合全員右を向きますが、そこで左を向くのは昔では軍法会議ものです。そのことが結果としてよい面もあり悪い面もあるわけですが、悪い例としてミッドウエーの海戦があります。

指揮官の方針が二転三転して、その間隙をつかれて雷撃を受け、空母その他艦船を多く失いました。それ以降、帝国海軍は敗戦の道を辿ったわけであります。

また良い面としては、復員後原理原則を経営面、あるいは処世術に活かし成功された方も多々ございます。

ところで、『恵日』五月号に、ご住職が

書いておられます「仏法は勝負」という学会の説と、いいや、それは違う、道理本因を大切にするのが仏法だという説。勝つか負けるか、白か黒かというわけでありますが、私がここで申します勝ち負けは、国と国との関係であり、個人の意思に関係がないのであり、私など一人十殺、一人で十人殺しなさい、そうしないと日本は戦争に負けると教えられました。しかし、グラマンに三度機銃掃射を受けましたが、一人も殺してはおりません。

学会でいう勝負とは考え方、行為、方法等が全く違うということを申し添えておきます。

佐久間勝治朗さん

さて、本論に入りまして、私が皆様の仲間（パーティー）に入れていただきましたのは六年前のことであります。

この六年間で感じましたことを率直に申し上げます。

一つは、最近のお寺・講の行事で出席率が低下の傾向にあるということです。

出席率ですべての判断は早計ですが、一応の目安として捉えて下さい。

過去三年間の地区総会の対比で申し上げますと、平成九年度を一〇〇％としてみますと、十年度（八六％）、十一年度（七〇％）と、下がっております。

また、今年の役員研修会も低調だったようですし、宅御講については、昨年の総会の席上でご報告した通りです。

さて、ではその原因は奈辺にあるかというと、考えられますことは、信心の度合い（欠如）、高齢者の死去もありますが、高齢化が進んでいるということです。

高齢化率（六十五歳以上が構成員全体の何％に当たるのか）の、一ヶ月前の全国統計では、一六・五％で、二十年前から約八％増であり、二〇二五年には二五％（四人に一人）の予想が出ておりますが、さて源立寺講中はどうでしょうか。

二つめは、講中で居眠りの方がおられることです。

若い人の育成問題、後継者の代行問題、等。いずれも講中全員で考える時期ではないでしょうか。ご本尊を受持しお護りするのは、講中の義務だと考えます。

俗な言葉で、庄屋の娘も当たって砕けろといいますが、砕けてもともと。みなさんでうまくいくように、一緒に考えましょう。

さて、活性化のための一例を紹介します。

小学校育友会の例でございますが、お母さんたちが、自分の子供、他人の子供を、区別なくお互い言葉をかけましょう、という運動を起こされました。もちろん学校とタイアップしてのことです。

登下校はグループで、危ないところは駄目。小さい子供をいじめては駄目。知らない人についていっては駄目。等でありますが、特に十七時以降、子供たちが外で遊んでいるのを見かけた場合は、早く家に帰るようお互い声を掛けましょう、という運動をされたのですが、それなりの成果があり

ました。

それをそっくりいただきまして、講中に当てはめてみますと、お寺（講）の行事に参加しましょう、あるいは宅御講にお参りしましょうということになります。

具体的には、仲良しクループ、各地区、各班、また役員はそれぞれの立場で、お互い声を掛け連絡を取られたら如何でしょう。しかも継続して。

中には忘れて居られる方もあるでしょう。人は一晩で六〇％忘れるといいますし、一週間もあれば大体忘れてしまいますから……。

言葉を掛けますと、今日は足腰が痛む、孫の守り、どこどこに行く等、返事があったとしますと、よく聞いてあげて下さい。時にはお寺の状況などお話をしてあげて下さい。横のつながり、コミュニケーションができ、次の手掛かりが見つかります。連絡を取り合わないとゼロは何時迄もゼロです。

また、宅御講の場合は、どこに不調の原因があるのか、なにがネックなのかを知ることが先決であります。

考えられることは、お仏壇の問題、家の問題、家族に対する気遣い、他。この場合はお詣りを勧めて下さい。

次に、歩いて、バス、電車に乗って、暑い、寒い、雨も降っているし、どうしよう。この場合はちょっとしたアドバイスが効果があります。

槻木地区の例を申し上げますと、お寺に集まり車に分乗し、お寺で解散いたします。

参加者にも思わず笑みがこぼれる

最近は新しい風（宅御講をしていただく家）が増え喜んでおります。どこの地区も同じだと思いますが、固定化していますので、それ以外の方に、眼を向けて下さい。また他の地区との交流も念頭に置いていただければ有難いと思います。槻木以外の地区は、地区の特性もあり、独自の方法を考えていただき実行しましょう。

中国に「兎を見て犬を放て」という諺があります。この意味は、兎を見てから犬を放しても決して遅くない、気が付いたら直に実行しましょう、との教えであります。

池の水面に小石を投げると、ポトンと音がして、水玉の輪（和）が広がります。この和を大切にしたいと思います。

十年かかってダウンしたのであれば、気長に、焦らずに、十年かけて元に戻せばよろしいと思います。

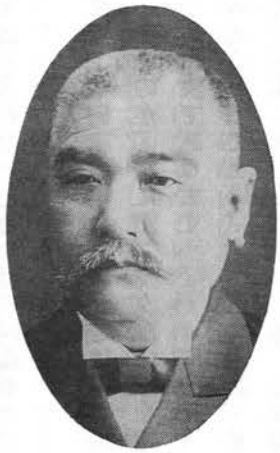
ご住職が折に触れて「モチベーション」の話をなさいます。動機付け、意識付け、何のために、自分のために、ひいては講のために、ということであります。

五月、九州で開かれました全国大会に参加いたしました。その席上、副議長近藤師の講演の中で、何のためにという言葉をくり返されました。何のための信心、何のためにお寺にお詣りするのか、信心の原点をみなさん見つめ直して下さい。と。

来年二十一世紀の幕が開けます。源立寺も三十周年の節目を迎えます。立宗七五〇年の記念すべき年も目の前でございます。

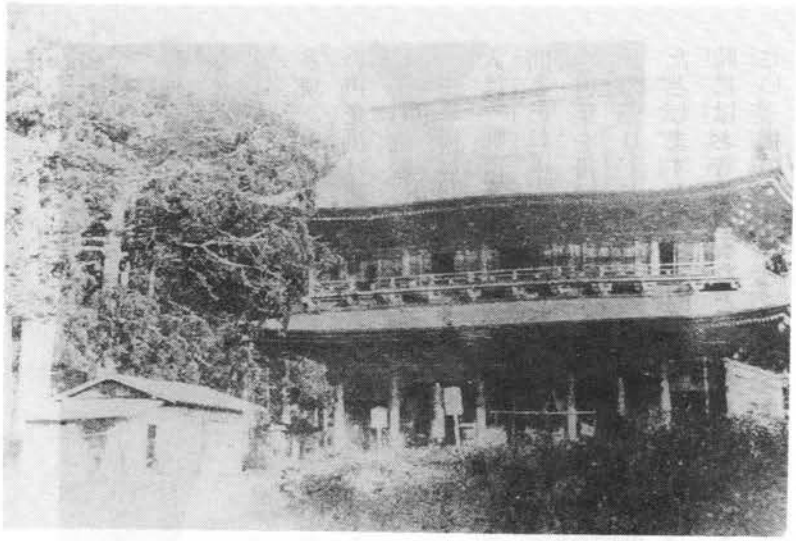
皆さん、明日に向って頑張りましょう。

【荒木清勇居士略伝】



忘れられた総講頭〔五〕

槻木守三



傷みのひどい三門と杉林（明治二十年代）

＊官有林伐木事件

明治初期まで、富士山麓一帯は、広大な森林が広がっていた。大石寺周辺も、今からは想像もできぬほど豊かな自然に恵まれ、境内地には樹齢六百年もの巨木が繁り、御堂から山門を通って黒門までも、参道はうっそうたる杉林に囲まれ、いかにも幽邃（ゆうすい）のおもむきがあった。

ところが、明治政府の殖産興業の政策によって、富士地方にも開発の手がおよびはじめ、豊富な水と森林資源を利用した製紙工場や製材工場、水力発電所が次々に建てられるようになった。大石寺の在所上野村や大宮周辺でも発電所や製紙工場が進出してきて、周辺の森林が急速に姿を消しはじめていた。

全国の寺社領が官有林として没収された上地令のことは先に述べたが、政府はその後、藩禄を失った士族の救済策として、こうした上地官有林や未開拓地を払い下げ、入植させることにしたのであった。その政令によって、大石寺の山門付近の山林も明治十五年に士族行岡正号に払下げられて、いよいよ伐採されることになったから、大騒ぎとなった。

当職の布師書状には、

「……当山ニテも境内の山門林、士族某へ払下げとあいなり候義につき、彼れこれと大混雑、既に六ヶ月にあいなり候えども、今にかたつきにもあいならず、是れも実に大事件、四方八方の心配、不肖に堪えず、諸事一時にあい起こり……」

（諸⑥－三六六頁）

と、困惑している様子が記されている。

大石寺側は、山門付近の立木だけでも保存をと、たびたび役所に請願したようであるが、あえなく却下され、明治十六年はじめから、ついに伐採がはじまったようである。そのため憤激した僧侶や檀徒と買受け人の間で実力行使にまで発展し、同年四月、買受け人側が刑事告訴に及んで、いよいよ事件は紛糾したのであった。

そこで布師や役僧達は、隠尊の霑師に窮状を訴えて助けを求め、事態を憂慮した霑師は、切迫した事件解決のためには荒木清勇（英一）をおいて他にないとみて、早速大阪に電信を送って、その解決方を依頼したのであった。

電報を受けとった荒木は講中ともはかった上で、大阪講中の代表として即座に大石寺に登り、関係者から事情を聴取するや、すぐさま静岡の裁判所長に面会して状況説明し、刑事事件に発展するのを未然に防いだ。そのうえで、沼津や静岡の役所に陳情、山林伐木を官に返還し、事件の沈静化に成功した。

しかしこの伐木事件は後々まで尾を引き、荒木や本山関係者はその後、何度も沼津や静岡の役所に足を運んでいる。荒木は翌十七年六月に東京内務省に出頭、桜井社寺局長に直接面会して陳情、その足で静岡、沼津の役所を回り、買受け人の払下げ規則違反として告発、ようやく、払下げ中止にもちこむことができた。この事件処理には多額の補償金などを要したと思われ、十六年旧十二月付けの布師書状には、

「……十四、五日間、官林の事件、彼の福田某より金の催促にてかれこれ心配、漸々日延べにあいなり……」（諸⑥－三五六頁）

とあって、本山にとって経済的に大きな負担となっている。

こうした本山の台所事情は充分承知していた荒木清勇は、旅費・運動費・交際費・通信費等、事件解決に多額の金銭を消費したのだが、自身のご奉公と思ってか、本山に一銭の請求をするでもなく、ただ黙って自分で負担したのであった。その上本山に参るたびにいつものように御供養を忘れることもなかった。

結局この事件の一切が落着したのは、明治十八年十二月になってからであった。荒木の活躍がなければ、この事件は逮捕者を出すような大騒ぎに発展し、山門周辺の山

うっそうとした杉林に囲まれた大坊と客殿（明治三十年代）

林もすべて切り尽くされていたであろう。

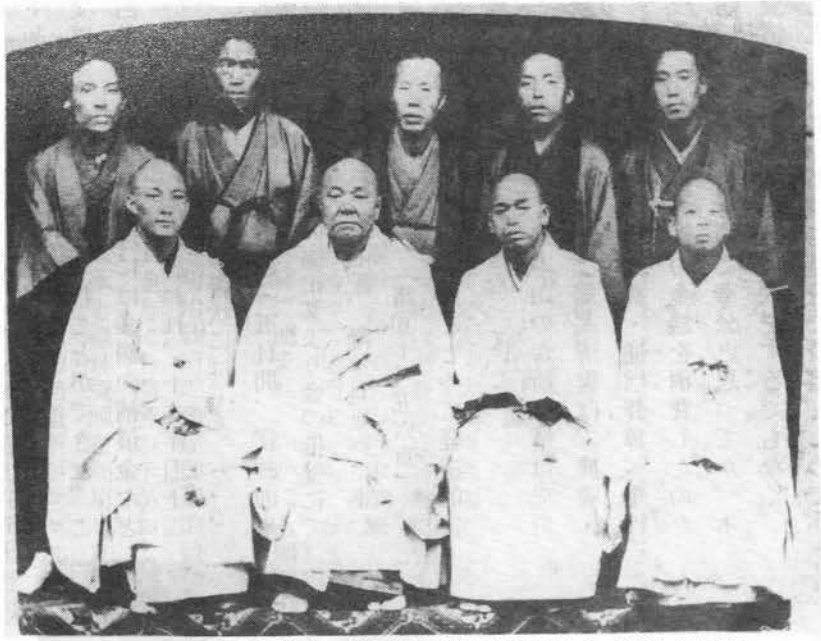
＊隠れたる徳

荒木清勇の陰徳はこればかりではない。学衆育成のためにも力をつくしている。この時期の蓮華寺に在勤していた所化僧の学費負担である。明治初年に細草檀林が廃止されてのち、学問を志す青年僧には不幸な時代が続いていたが、ようやくこの頃から都会の寺院に在勤しながら私学塾に通う道が開けてきた。大阪には当時、藤沢南岳の主宰する漢学塾・泊園書院が淡路町にあって、懐徳堂と並んでその名を全国にとどろかせていた。そこでこの泊園書院に学ぶため、本山を出て蓮華寺に在勤したがる所化が多かった。霑師の弟子では、加藤慈雲（日普）、土屋慈観（日柱）、佐野慈慶、佐藤慈要、松井慈安等の青年僧である。（柱師らの漢詩文の素養はこのときの修学のたまものである。）

霑師は六百遠忌後、本山を離れ、蓮華寺の離れ寿松庵を終の棲家とするつもりでいたから、その際、老後の生活費をさいて蓮華寺在勤の弟子の学費を負担していたことが次の書状でわかる。

「……このたび当地へ来たり、様子を伺い候に、蓮華寺も極々難渋の処へ、愚弟六人、本山之弟子両人、厄介にあいなり、学資等なかなか不容易に物入り、もっとも講中の牧野、居田、荒木より毎月三円づつ、池田講中より一円、その他五十銭二十銭十銭五銭づつ寄付も之れあり候へども、なかなか行き足らず、老身よりも五円づつ年に六十円の出金……」（明治16年1月16日付、諸⑰－八六頁）

この記述をみると、所化僧の学費負担は霑師の他にも、荒木・牧野・居田の三名が毎月三円づつ特志御供養していたことが分かる。また貧寺の源立寺講中からも毎月一円拠出していたことは名誉なことである。質素で余裕もない生活の中で、僧俗それぞれが協力し、次の世代の人材育成にも心を配っていたことは、いまの亀鑑とすべきことでもある。



左から二人目：日霑上人、後列は、蓮華寺講中か？（明治十年代）

＊護法会議

さて明治十年代は西洋の文物が大量に輸入され、急激なインフレが進行した時代であったが、明治十四年の政変以後、松方大蔵大臣が急激な金融引き締め策を行った。いわゆる松方デフレである。すると世間は一転して不況となって米・絹などが下落したため、農村部は深刻な不景気にみまわれた。

ちなみに大石寺（大坊）の台所は、各法要

や御開帳の御供養以外、約十一町歩の田と約十七町歩の畑を基本財産としてまかなわれ、その小作米の年平均約三百八十俵のうち二百三十俵を消費し、残りを売却して諸経費にあてていたのである。ところが明治初年の地租改正以来、これらはすべて課税対象となっていた。そこに小作料の減免要求などが起こりはじめていたから、ただでさえ不景気のところに、基本財産の収益まで悪化しはじめた。

ちょうど明治十四年に六百遠忌法要が営まれ、全国から二千人もの登山者があって、近郷の参詣者とあわせて大石寺は久しぶりの賑わいをみせたのであるが、これを境にもろに不況の影響をうけ、記念事業等の精算もいくぶん残っていたらしく、次第に逼迫しはじめ、徒弟教育や諸堂の営繕さえままならない状況に陥っていた。

そこで、おりからの自由民権運動の熱に便乗したわけでもなかろうが、布師は全国の住職・講頭・総代等に招請状を送り、御会式を期して本山に大会議を開き、永続維持法を相談することにしたのである。明治十六年十一月のことである。

当日の布師の開会の辞をみてみよう。

【開会式演説】今回日布が各地の檀講諸氏の都合をも顧みず倉卒にその総代委員を招集したるは実にもってやむをえざる事情あって決行したるものにして……中略……近来我が門やや不振の色を顕わし、教育すべき弟子等も教育すべき資糧なく、塔中修覆を加うべきものも之れをなすの資本なし。……中略……恐れ多くもついには最大無比の大御本尊所住の霊地も鹿の臥す処とならざることを保し難し。これ則ち日布が薄徳より起こるところなり。……中略……今や本山人少にして之れが挽回をはからんと欲するも能わざれば、各地方、護法熱心の諸氏に謀り、之れが挽回の策を立てんとして、今般各員諸氏の来会を乞い、護法会議を開いて我が門百般の改良を行わんと欲する所以なり。……以下略。」

明治以降、時代にあわなくなった本末制度や寺院のあり方が、急速に大石寺の存立を危うくしつつあった。そのため、全国の主だった僧俗を集めて会議を開き、宗務・学務・財務等の抜本的な制度改革を行おうというものであった。

この時、参集した僧俗は五十六名、議長として仙台仏眼寺の大石慈含（後の応師）が選ばれ、副議長に荒木清勇がなっている。（なお霑師は隠居のため招致されていない）。会期は一週間で、この時初めて現在の宗制・宗規の原型ともいうべき規則が討議されたのである。蓮華寺講中の代表として牧野・荒木・居田・田村等が、また住本寺からは加藤・大西らが出席していたようであるが、関西の法華講中の主張は、財政はともかく、まず布教と人材育成をということであった。会議はほぼ原案通り可決、大石師の手腕が認められて宗務局長（後に法務局と改称）に登用され、これ以降、寂日坊に住して宗務行政にあたることになった。宗務局の当初の顔ぶれは次の通り。

宗務局長・大石日応
参事・富士本日意
理事・富岡日義
理事補・吉田東保（理財）
（々）・森田政雄（理財）

こうして大石寺門流の組織改革や財政改革がスタートしたかに見えたが、深刻化する不況のため、大石寺の経済はたちまちに破綻してしまい、制度改革そのものがとん挫してしまったのである。（続く）

ちょっと寄り道 ㊳

ビジネスチャンス

伯耆の里　もりたかんどう

ワープロを買うかパソコンを買うか迷っている客に、「これからはパソコンですよ」といって、パソコンをすすめる店員はいない。たいがいは、「パソコンはむずかしいですよ」といって、ワープロをすすめる。客の方はむずかしいの一言でおそれをなしてワープロを買う。数年たってワープロの限界を知った客はあらためてパソコンを買うことになる。この店では二度のビジネスチャンスをものにしたことになる。

NECは五年前まで、5インチフロッピーのパソコンを出していた。世はすでに3.5インチフロッピーが主流になっていたのに、こういうパソコンを売りつける神経がわからない。過去の互換性という理由もあろうが、次のビジネスチャンスの意図がはたしてないだろうか。

さて近所でこんなことがあった。あるカメラ屋さんが二〇〇〇年問題と7桁の郵便番号に対応できる販売管理の見積りをA社に頼んだところ、380万円の見積書がきた。高すぎるというと、270万円になった。それでも高いと難色を示すと、150万円になった。100万単位で安くなるのはどうもおかしいと、別の業者に依頼した。撮影と現像とカメラやフィルムの販売が中心のカメラ屋さんである。特注の販売管理ソフトを組まなくても市販ソフトで十分だから、A社と同じ機器構成での販売管理システムが50万円ですんだという。A社のように困っている客の足もとをみてビジネスチャンスをねらうものがいる。

いわゆる二〇〇〇年問題が騒がれる裏には、不安感に便乗している連中がいるようだ。そもそも二〇〇〇年問題は、まだメモリの制約が厳しい十数年前まで、日付計算をするとき西暦下2桁で処理していたため、西暦二〇〇〇年を一九〇〇年と計算ちがいすることをいう。通常のバグとちがって、原因も対応も、そしてやがて西暦二〇〇〇年がくることも、はじめからわかっていることである。パソコンメーカーでは、あのNECでも86年以降の製品はすべて対応ずみである。いつ対応するかは、信用かビジネスチャンスかに関わってきて微妙である。

少なくとも日常コンピュータで業務処理をしているところが十数年も同じ環境のままとは考えにくいし、対応しないで何らかの損害がでれば訴えられるから、ひととおりは対応ずみだと思う。それでも念には念を危機感をあおるのは、二〇〇〇年問題に便乗した政府の景気刺激策ではないかという気もしてくる。

（大安寺住職）

『「坊ちゃん」の時代』は、昨年の第二回手塚治虫文化賞でマンガ大賞に輝いた作品だ。五巻にも及ぶ大作で、完結まで十三年かかっている。関川夏央氏のシナリオを谷口ジロー氏が演出、作画した。

日露戦争直後の明治三十九年から四十三年にかけての五年間が主な舞台となっている。マンガの世界では人気をまったく期待できないとされた時代を扱った、異色の作品である。小説「坊ちゃん」を素材として、関川氏は明治というタブーの世界にあえて挑戦した。地味なテーマながらこつこつ描いていこうとしたのは、明治に対する氏の特別な想いがあった。

「明治は激動の時代であった。明治人は現代人よりもある意味では多忙であったはずだ。明治末期には日本では近代の感性が形成され、それはいくつかの激震を経ても現代人のなかに抜きがたく残っている。われわれの悩みの大半をすでに明治人は味わっている。つまりわれわれはほとんど（その本質的な部分では少しも）新しくない。それを知らないのは不勉強のゆえである。」

第一巻の巻末にこう記した氏は、明治がおだやかで抒情的であるという通俗的で通り一返な解釈にうんざりしていていた。また「坊ちゃん」ほど哀しい小説はないと考えていた。しかし映像化された「坊ちゃん」は、氏の期待を裏切るかのように、こっけい味を主調とした作品として描かれている。

こうした想いが、「国家と個人の目的が急速に乖離しはじめた明治末年を、そして悩みつつも毅然たる明治人を描こう」と試みるエネルギーとなったのだという。

明治三十八年、主人公の夏目金之助は、ロンドン留学以来の神経症に苦しみ悩んでいた。小説を書き始めた目的も、神経症の治療にあった。

まず第一巻では、「坊ちゃん」の誕生が淡々と描かれる。そこには、一体小説が現実なのか、はたまた激動の明治を生き抜く様々な人間模様が小説なのか、そんな錯覚さえ憶えるほどに、金之助をとりまく時代や人々が見事に描かれている。

残りの四巻いずれも魅力ある作品で、マンガの醍醐味がぎっしり詰まってる。読後感もずしりと重い。選考委員の印口氏が、「明治末期という時代をさまざまな角度から描いたシリーズの完成。虚々実々の人間模様がマンガ読者に近代文学への興味をかきたてたと思う。小説でもなく、映画でもなく、マンガという表現世界だからこそ成立した世界観である」と、評したとおりの作品だ。

読書案内

松田銘道

関口真央
谷口ジロー 著

『坊ちゃんの時代』全五巻

双葉社

定価 各九〇〇円～一二三〇円

恵日だより

神通寺ご住職を囲んで記念撮影（神通寺本堂）

婦人部総会

六月二十三日（水）

婦人部の今年の総会は、明石市の東部に位置する神通寺参詣をメインに行われました。

六月二十三日の水曜日、午前九時に源立寺を観光バスで出発。一路明石市の神通寺をめざしました。

十時半過ぎに神通寺に到着すると、本堂において、川井泰円ご住職の道師により読経唱題し、終了後、法話をおうかがいしました。

川井住職は、柿本人麻呂が明石を詠んだ、

ほのぼのと　明石のうらのあさぎりに　しまかくれゆくふねをしぞおもふ

の歌を紹介して話を始められましたが、さらにものの見方についてなど、種々貴重なお話をいただきました。

さらに、全員にお土産までいただき、

明石海峡大橋をバックに

大変お世話になった神通寺を、十一時半過ぎ後にしました。

その後、新神戸オリエンタルホテルにて、バイキングの昼食をとり、布引ハーブ園・明石大橋などを見学し、午後五時半過ぎには源立寺に到着、各自解散しました。

ご案内・お知らせ

＊墓地掃除のお願い

八月一日の日曜日、講中勤行会が終了後（午前八時四十五分頃）に、本堂裏手の墓地境内を清掃いたします。源立寺に墓地のある方は、清掃にご協力下さい。

一日講習会のご案内

八月二十九日（日）の午前十時より、源立寺本堂にて「一日講習会」を開催します。テーマは「信仰と生活」です。

むずかしい内容の勉強・講義ではなく、毎日の生活と信仰が、どうつながっているのか。それは日頃、病気をしたり個人的な悩みなどに際して、それが信仰のうえから、どのように考えて、対応したら良いのか。自分は信仰を支えに対処しようとしているか、信仰を離れて解決の道を求めているのか、などなど。

自身の信仰に対する本音の姿勢、大聖人に対する信頼の再確認などを、ざっくばらんに話し合って、これからの生活の糧、信仰の増進にして欲しくテーマを決めました。

高尚な話や意見を聞きたいのではありません。失敗談や反省話、心配事を気楽に語り合い、ちょっと良い話を持ち帰って欲しいのです。

暑い時期ですが、一人でも多くの方々に、ぜひとも参加をお願い申し上げます。

【企画部】

＊南近畿青年部夏期研修会のご案内

日時＝平成11年8月21日　午後4時から
　　翌22日　午後1時30分まで
会場＝和歌山県　妙海寺・妙音寺
費用＝二〇〇〇円
詳細＝お問い合わせはお寺まで。

なお、今回は講師として、大蓮寺執事中原寿衛（じゅえい）、興風談所坂井法曄（ほうよう）両師の若手僧侶をお迎えし、日頃の研鑽の成果をお話しいただきます。

青年部各位には、お誘い合わせの上ご参加下さい。

【訃報】

〔此花区〕

光華院妙智信女　七月十九日寂
俗名　井上知子之霊　行年五十六歳
直徳院法義信士　七月二十三日寂
俗名　上西義雄之霊　行年八十三歳

この度、右の方がお亡くなりになられました。

謹んでご冥福をお祈りします。

八月の行事

一日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会
　　午後二時　お経日
七日（土）　午後二時　広基寺お講
八日（日）　午後一時　お講
十三日（金）　午後一時　お講
十五日（日）　午後一時　盂蘭盆会法要
二十一・二十二日（土・日）　南近畿青年部研修会
二十九日（日）　午前十時　源立寺一日講習会

※役員会・法華経講義はありません。

※八月一日の継命新聞の発送は『宝塚・川西』が担当です。
※九月一日の継命新聞の発送は『旭丘・緑丘』が担当です。

盂蘭盆会法要のご案内

恒例のお盆法要は、十五日の午後一時より奉修いたします。この日は毎年、お墓参りなどで、お寺の前の道路（国道一七六号線）が、交通渋滞となります。車で参詣される方は、普段より早めに家を出発して下さい。大阪市内から阪神高速池田線を利用される方は、「木部・小花インター」で下車して下さい。約三分で到着します。

また、塔婆をお墓に建立される方は、事前に申し込み、持ち帰る旨をご記入下さい。当日の申し込み分は混雑して、持ち帰ることが出来ない事がありますので、ご了承下さい。

恵日　平成十一年八月号　通巻五十四号
平成十一年八月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
購読料　年間二〇〇〇円（含送料）
加入者名　源立寺法華講
〒振替口座番号　00930－5－14366

恵日　八月号　通巻五四号　平成十一年八月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料　年間二〇〇〇円（含送料）